

ラヴ・ディアス

—— フィリピンの怪物的作家がいま、ヴェールを脱ぐ！

石坂健治（映画研究者、東京国際映画祭プログラミング・ディレクター）

海外での盛名とは裏腹に、何らかの理由でなかなか日本に紹介されない映画作家がいる。今回のYIDFFインターナショナル・コンペティション審査員の一人、ラヴ・ディアスは、さしずめその筆頭格だろう。たとえば黒沢清『リアル〜完全なる首長竜の日〜』や青山真治『共喰い』もノミネートされた8月のロカルノ国際映画祭のコンペで、ディアスは若くして審査員長をつとめている。ヴェネチア、シンガポールなど、欧亜の映画祭で受賞を重ね、作家として高い評価を受けていることの証左といえるだろう。ところが日本では、オムニバス映画の一篇『蝶は記憶を持たない』（2009）が東京国際映画祭（TIFF）で上映されたくらいで、長篇を見る機会がなかった。なぜ紹介が遅れたのか？ 長いのだ。とにかく長いのだ。とてつもなく長いのである。ディアスの映画のあまりの長さを前に、わたしたち上映者はタイミングを逸し続けてきたのである。

1958年ミンダナオ島に生まれたディアスは、マルコス独裁政権下で観たりノ・ブロッカ『マニラ・光る爪』（1975）に衝撃を受けて映画界を志す。98年にメジャー映画会社リーガルの製作になる『バリオ・コンセプションの犯人』という“普通の”映画で監督としてデビューするが、ディアスがディアスになるのは2001年の『ウェスト・サイド・キッド』からである。米ニュージャージー州でフィリピン移民の少年が殺され、同じ移民の刑事が捜査に乗り出すという主筋を持つ本作は6時間15分で、フィリピン人観客の度肝を抜いた。その後も、貧しい農民一家の生活を1971年から87年まで綴った『あるフィリピン人家族の創生』（2004）が10時間43分、強大な台風で全滅した村のその後について、前半をドキュメンタリー、後半を劇映画に分割して描いた『エンカントスの地の死』（2007）が9時間、ヴェネチアのオリゾンテ部門最高賞に輝いた『メランコリア』（2008）が7時間30分と、あの王兵も真っ青の超長尺を連発している。

ディアスはもともとミュージシャンとして出発した人で、作品はどれもみな魅惑的な詩情に溢れ、ギターを自作自演で付けたり、自作の詩を挿入したりと、映画の枠を超えたアーティストの面目躍如である。また、ディアス作品はいずれも祖国フィリピンの現状を直接・間接に解析している。たとえば『あるフィリピン人家族の創生』は、ひと

つの家族の日常から激動の末期マルコス時代を総括しようとする試みである。そういえば同じフィリピン人で山形ゆかりのキドラット・タヒミックの『虹のアルバム 僕は怒れる黄色'94』（1994）も、ほぼ同じマルコス末期を切り取った4時間のドキュメンタリーだった。次の山形ではこの二本立てが観たいけど、合計15時間か！

今回、YIDFFとTIFFで上映される『北^{ノルテ}—歴史の終わり』は4時間10分なので、ディアスにしては短い方なのがお分かりだろう。しかし肝心なのは内容だ。フィリピンのある町で殺人事件が起こり、真犯人は逃げ、間違えられた男が投獄される。この二人のその後が並行して描かれる。シャバの空気を吸いながら罪の意識で徐々に狂っていく前者。刑務所内で徐々に精神の自由を獲得する後者——。ドストエフスキー『罪と罰』に触発されたという本作は、むしろ「その後の罪と罰」といった趣である。5月にカンヌ映画祭の「ある視点」部門で上映され、無冠に終わったものの、ただちに「すごい」「この作品こそ真のバウム・ドールだ」といった声広がった。筆者にとっては、4時間の驚愕映像体験という意味で、^{エドワード・ヤン}『牯嶺街少年殺人事件』（1991）以来の衝撃の一本だった。南国のドストエフスキー。罪と罰と信仰の問題が、ロシアとは正反対の波頭きらめくフィリピンの海と太陽のもとで展開されていくさまは圧巻である。この一本だけでも山形に来た甲斐はある、と断言しよう。

ディアスを紹介したので付記すると、いまフィリピン映画はすごいことになっている。最も象徴的なのは、国立フィリピン文化センター（CCP）が運営するシネマラヤ基金がインディーズ製作への支援を行っていること。国がインディーズを応援するのは新しいコンセプトである。その結果、若手作家たちがシネマラヤを拠点に集い、インディーズ映画などとはまるで無縁だった大スターたちが、そうした作品のクオリティーの高さに注目して続々と出演するようになっているのである。

1950年代、70年代に続く、第三の黄金時代が到来している感じなのだ。その兆候の一端を示すなら、毎年3月のアジア・フィルム・アワード（AFA／香港で開催されるアジア版アカデミー賞）でここ数年、男優賞・女優賞ともにフィリピン勢が受賞を重ねている。いずれもTIFFで上映した

が、『浄化槽の貴婦人』（2011）のユージン・ドミンゴ（フィリピンの泉ピン子）、米アカデミー賞フィリピン代表作品になった『ブワカウ』（2012）のエディ・ガルシア（同じく三國連太郎の雰囲気）。そして日本未公開だがブリランテ・メンドーサ『汝が子宮』（2012）のノラ・オーノールも今年受賞した。ほかにも、70年代を代表する大女優で、いまはバタンガス州の知事をつとめるヴィルマ・サントスも、インディーズ映画に出るようになってきている。これまでなら考え

られなかったフィリピン・インディーズと大スターの蜜月時代が、アジアの賞レースを席卷している。

そういえばメンドーサも最近でこそ『囚われ人 パラワン島観光客21人誘拐事件』（2012）が公開されるようになったが、まとまった紹介が遅れている作家の一人だ。ディアスと違い、この人の場合は、血しぶき（内臓、生肉）が飛び散る描写の強烈さゆえに、上映の機会が限られてくる面があるのかもしれない。

■上映

『北一歴史の終わり』【JF】 10/16 10:00- [A6]
ノルテ